
我が人生に悔いなし！

たか@や

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我が人生に悔いなし！

【Nコード】

N7481P

【作者名】

たか@や

【あらすじ】

いきなり異世界に放り出された三木智也。かなり前向きな彼は初めての環境にも尽く適応していきます。いつの間にか持っていたチート能力で、無双とかなすること。

いわゆる異世界トリップ物です。試験の逃避に書いています。更新不定期です。勢いで書いてるので、説明不足なところが結構あるかも。完結させるつもりで書いてます。処女作でかつ文才ないので、大変なことになってますw

一話（前書き）

鬱展開とか、大嫌いです。読んでて気楽な小説を目指します。

一話

ピピピッピピッ

「ふわぁ」

大きなあくびと共に体を伸ばしながら、目覚まし時計を消すと、彼は半身をベットのの上に起こしたまましばらく壁をぼーっと眺めていた。

鳥がちゅんちゅん鳴いている声が聞こえてくる。

一見するといつも通りの朝に思える。

学校行きたくないなあ……何か嫌な予感がするし。
昔からこういう直感だけは外した事がないのだ。

彼はそう思ったが、そうもいかない理由も同時に思い出してしまった。

そうだ、大学行かないと出席がやばいんだった。
しょうがないか。彼は心の中でそうつぶやくと、ベットから降りて
カーテンを開けて身支度を始めた。

その後、冷蔵庫に何もなかったことを確認した俺は、身支度を済ませて
そのまま近くのコンビニまで来ていた。

「とりあえず、サンドイッチとおにぎりかなあ。ついでにお昼の分
も買っていくか」

サンドイッチとおにぎり数個をかごに入れ、ペットボトルのお茶を
手に取るとレジに向かおうと歩き始め、そこで見たことのある顔を
発見したので声をかけた。

「祐樹じゃん。おはよう」

彼は始めから俺のことに気づいていたみたいで、軽くあいさつを返
すと

「おまえも朝飯か？それにしてもいな」

とかこの中を覗きながら言った。

どこのホストだという格好に、ちょっと眠そうな目が特徴のこの男。名を越後祐樹という。

実は一年前までバイトでホストをやっていたので、この格好も納得なのだが、いくら他の服がないからっていい加減普通の服を買えばいいのと思う。

ちなみに源氏名は聖也で、からかって呼んでいた当初は反応が面白かったのだが、最近は全然反応してくれないのでつまらない。

「昼の分も買つところと思ってさ。食堂行くのも何かだるいし」

「そうか。三木がそうするなら俺も昼飯買っておくかな」

別に付き合わなくていいのに、とも思うがこいつはこいついうやつなのだ。

俺はよく独り行動を思いつきでするのだが、こいつはそれに合わせようとしてくれる。

独りは別に辛くもなんともないのだが、断る理由もないので受け入れることにしている。

祐樹が買い終わるのを待つて、二人で学校に向かう。

「そういえば、祐樹は出席日数大丈夫なのか？ お前も結構ぎりぎりだろ」

「まあ、自主休校で3週間ずっと休んでたからな。これから一日も休まなかったら大丈夫だけど」

ゴールデンウィークならぬプラチナウィークだとのたまうこの友人は正直大物だと思う。

校門まで残り20mほどを残したところで信号が赤になったため、立ち止まる。もうこの変になると、登校する人でいっぱいだ。しかし、周りのざわめきを他所に俺は嫌な予感が止まらない。

「おい、祐樹。もうすぐ何か起こるぞ。さっきから冷や汗が止まらない」

「げ、まじかよ。また事故とかか？お前が車に轢かれるのを見るのはもう嫌だぞ」

そうなのだ。ついこの間も嫌な予感がしたときもこいつと一緒にいたのだが、死角から飛び出してきた車に轢かれて、一ヶ月入院する羽目になったのだ。

身構えていたお陰でそれだけの怪我で済んだのは僥倖だったが、代わりに出席日数がやばくなった。くそつ。

信号が青になっても立ち止まって周りをきよろきよろする二人を怪訝な目で見て、周りの人たちが道路を渡っていく。

……何にも起こらないなあ。

とりあえず、信号がまた赤になる前に渡ろうと隣にいる友人に伝えようとしたその時、俺は空中に放り出された感覚と共に意識が暗転

した。

「三木、とりあえず信号渡っちまおうぜ。このままだと赤になっちゃう。……三木？」

その声に応える人はなく、周りの啞然とした顔を残したまま、三木智也はこの世界から去ったのだった。

一話（後書き）

小説とか初めて書きましたけど、難しいですね。。最初、第三者視点で書きはじめたんですが、難しくて止めました。なので、ちょっと文がおかしいかもです。逃避で書いてるので、更新は期待しないで下さい（汗）

二話（前書き）

こんな時間になにやってんだか、俺…

二話

——声がした。

透き通るような声。

自分に問いかける声に、俺は答えた。

「俺は——」

目が覚めた。

辺りを見回してみる。

視界に入るのは、木、木、木。

うららかな陽の光に、その光を反射し風に揺れている木の葉たち。

おかしいな。俺の記憶が正しければ、さっきまでアスファルトの道路の上で信号待ちをしていたはずなんだけれども。

目の前を蝶々が飛んでるのを見て、俺は考えるのを止めた。

うん、これはいわゆる神隠しというやつなんだろう。だったら、俺にはどうしようもないよね。ってか、今頃大騒ぎになってるだろうなあ…と友人の顔を思い浮かべる。

祐樹、事後処理頑張ってくれ。人が目の前でいなくなったとか、説明大変だろうなあ。

いやいや。祐樹のことを考えてる暇はないぞ。

今、現状で一番大変なのは俺なのだ。たぶん。

「とりあえず、朝飯食べるか…。腹が減っては何とやらって言うし」

そう言って俺はもそもそと朝買ったサンドイッチを食べ始めた。

「さて、とりあえず携帯は…圏外か。まあ、樹海っぽいもんなあ」

朝飯を食べ終わって、一息ついた俺は携帯を見てた目線を上げ、周
りを見渡してため息をついた。

「幸い食料はまだあるし、ちょっと歩き回ってみようかな」

そうと決まれば、とばかりに俺は立ち上がり歩き始めた。

日はまだ昇り始めたばかりだった。

しばらく歩き回ってみたが、何かさらに鬱蒼としてきた気がする。

やっぱり適当に歩いたら駄目か。

でも、直勘的にはこっちにいった方がいい気がするんだよね。こういう危機的状況の時ほど、俺の勘は信用できるし。テストの時は、当たらないけど。危機感が足りないのか？

何てことを考えながらしばらく歩いていると、開けた場所にログハウスの家が建っているのを見つけた。

「良かった。家があるってことは人が住んでるところみたいだ」

実は、人も住んでない田舎の山奥かとちょっと心配してたんだよ。

「すみませーん。誰かいませんかー？」

どんとどんとドアを叩きながら、大声で呼びかけるが応える声はない。

「留守かな……」

辺りを見回してみても、それらしき人影は見えない。

ドアノブを回してみると、どうやら鍵はかかっていないようだ。

悪いとは思ったが、ちょっと朝の生理現象を催していた俺は、中に
入らせてもらうことにした。

「失礼しまーす…。あのー、トイレを…っ」

骨だ。

そこには骨があった。

いや、骨じゃなくてこれは白骨死体というやつだろうか？

テーブルに突っ伏したぼろぼろの服を着た骨が、暗い眼窩をこちら
に向けていた。

「うわぁ、人体模型じゃない…よね、これ。すみませーん、トイレ
借りますよー」

とりあえず、トイレ（大）が限界に近かった俺は骨を放っておいて
トイレを借りることにした。

「はあ、すっきり。しかし、水が流しっぱなしのトイレなんて初めて
みたよ。どういう仕組みなんだろ？いくらなんでもこの辺、水道
通ってないだろうし」

紙の代わりに葉っぱが置いてあるし、とぶつぶつ言いながら戻って
くると骨の処遇について考えることにした。

「…どうしようか、これ。」

二話（後書き）

作者は中二病ですw

三話（前書き）

最初の頃と明らかにテンションが違っし（笑）

三話

流石に骨をそのままにしておけなかったので、俺は服の感じから彼だと思われる骨を埋めてあげることにした。

探したのだが、シャベルはなかった。なので木の棒で穴を掘ることになった。めっちゃ重労働だった。

「あ、穴を掘るって大変なんだな…。今ならシャベルの有り難さが分かる…」

すでに半そでになっているが、それでも汗がたっぷり染み込むほど汗をかいており、最後の仕上げに骨を底に横たえ、土をかけ終わると達成感もあって一気に疲労感がやってきた。

「しかも、もう夕方だよ…」

こんなに穴掘りが大変だったなんて、いや、いい経験になった。

もうしたくないけど。

「ここまでしたんだから、俺が家使ってもいいよね。有り難く使わせて頂きます」

と今さっき埋めた骨に向けて頭を下げると、彼のだろっ家に足を向けた。

「野宿じゃなくて、良かった」

…結構、図太い性格のようだ。

翌朝。

家にあるベットや井戸やらシャワーらしきものやトイレなどを遠慮なく使い、おにぎりで腹を満たした俺は気分よく目を覚ました。

だって、ベットとか俺が使ってたのよりずっとふかふかだったし。

まあ、ほこりまみれだったのはいけないけれども。

「という訳で、今日は家の掃除をしたいと思います！後、食料確保かな？」

正直ほこりがすごいのだ。ベットは昨日寝る為に外で叩いたけれども、一度ちゃんと掃除しておく必要がある。

一体、いつあの骨のお方はお亡くなりになったのだろうか。

結構経ってるんだろうな。多分、彼の体を苗床にして育ったハエの死体も大量にあることだし。

食料の方も心持たない。

おにぎりはあと1個しかないのだ。

狩りとかする必要がありそうだ。出来るかな？いや、出来なくてもやらないといけないのだ。

何しろ今までにない位独りぼっちなのだから。ぼっちは自分のことは自分でやらないといけない。

誰も助けてはくれないのだ。それにいつ帰れるか分からないし。もしかしたら、帰れないかもしれないし。

「さて、では掃除掃除っ」と

ほうきつばいものがあつたので、これを使ってきれいにするぞー。つと氣勢をあげて俺は外にほこりを叩きだしていった。

無事に日が真上に昇るまでに一通り掃除を終えた俺は、一息ついた後、食料調達に向かうことにした。

さつき最後のおにぎりを食べたからもう食料がないのだ。

備蓄してたであろう場所には何もなかったし。

ハエの死体はあつたけど。またハエかよ。

「狩りといえば、弓矢だよな」

そう、俺の目の前には弓矢があるのだ。

ちなみに槍や剣、皮で出来た防具っぽいものもあったのだが、俺に使えるはずがないのでそのまま置いてある。

もちろん弓矢も使ったことなんかないのだが、簡単に出来そうな気がしないか？

そんなことないですか、そうですね。

「よし、今夜は兎鍋だ！肉を腹いっぱい食べてやる！やつほーい！」

と勢い込んだ俺は弓矢と家にあつたナイフ、ペットボトルに入れた水などの必要なものをバックに入れて家を飛び出していった。

（5時間後）

「うう、弓とか使ったことないんだから、駄目に決まってるじゃん。
。」

半泣きになりながら帰ってきた俺がいた。

「兎っぱいのとか、鹿っぱいのは結構見かけたんだけどなあ…」

全くまっすぐ飛ばせないのだからしょうがないんだけど…。

「ゲームみたいに、弓を装備したら使えるようにはならないもんだなあ」

所詮素人が簡単に出来ることではないのだ。

「とりあえず今日は早く寝て、飢えを凌ごう…」

と弓矢を置こうとしたところ、目の前に何かあるのに気づいた。

「ミキ トモヤ ステータス…?」

そこには、ミキ トモヤ ステータス 目の前の弓を装備しますか？ と書いてあるアクリル板のようなものが浮いていた。

三話（後書き）

続きは、また逃避始めたら書きます。

四話

ミキ トモヤ ステータス

レベル 1 経験値 8 次のレベルまで 2

力 8

防御力 9

速さ 7

体力 10

運の良さ 8

賢さ 16

直感 46

弓技能 1

振り分け可能ポイント 18

装備 弓

「うむ…」

とりあえず、弓を装備するか聞かれたので、はいと答えたところ、
んな感じになった。

「何か、直感だけ飛び抜けていいんだけど…」

まあいいか。確かに弓とかクソだったから、1なのは納得だし。直感のお陰で肉食動物とかに会わなかったんだろうし。熊とか出たら、ゲームオーバーだよな。

「この振り分けポイントを使えば、弓も上手く使えるようになるのかな？流れから言って」

というか、この変なアクリル板が出てくることに疑問を持たなくては。何だこれ。

「どう見てもドラ。エとかで見るステータスだよな…」

直感とか弓技能とか振り分け可能ポイントとかは違うけど。

「あんまり驚いてない自分が怖いぜ…」

動じない俺。何かカッコいいな。でも、動じないというより、何か当たり前って感じなんだよな！。分かる？この違い。

「考えてても仕方ないから、とりあえずポイント振ってみよつと」

そして俺は、振り分け可能ポイントを全部振り込んだ。

速さに。

え？何で弓技能に振り込まないのかって？だって、速さだよ？「ふっ、遅い」とか言いながら後ろに回りこんでみたくない？

…そうですね。俺だけですか。

でも、まあ振り込んだじゃったからもう遅いよね。弓とか練習すれば出来るようになるでしょ。こうなったら、素手で兎とか捕まえちゃるし。後ろに回りこんでやるし。という訳でもう寝ます。お休みなさい。

翌日、そこには感動の涙を流しながら、兎を手に掴んだ三木が居たという。

ちなみに、兎はその辺に生えてた雑草とかと一緒に煮て食べました。大変おいしかったです。塩とかは置いてあるしね。ちょっと生臭かったけど。

経験値 12獲得 レベルが2になった。

力	8	.8
防御力	9	.9
速さ	2	7.5
体力	1	1
運の良さ	8	.8
賢さ	1	7.6
直感	5	0.6
弓技能	1	.1
振り分け可能ポイント	1	2

四話（後書き）

逃避逃避

五話（前書き）

自己満足だけど、楽しいですね^^
小説書くのってw

五話

「食料の方は目処が付いたし、次はここが何処なのか調べなくちゃなあ」

兎は何匹か獲ったから、2日位は大丈夫だろうし。

余りに早く動ける自分を見て、最初に見付けた兎が逃げようとするたびに回りこんで遊んだのは内緒だ。

ホントだったらもっと獲れただろうに、遊び過ぎたかな。

「じゃあ、まず書庫っぽいところを調べてみよー」

しばらく食料の方が緊急だったから、書庫とかまだ見てないんだよ。もしかしたらここがどこなのか、何か手がかりがあるかもしれない。

「これ、何語だ…？」

書庫にある本とか見ているんだけど、何か知らない言葉で書いてある。

「ラテン語系統じゃなさそうだけど…」

しばらく漁っていると、地図っぽいを見付けた。

「え、何この地図」

大陸が土偶みたいな形をしているんだけど。土偶が真ん中にドーンとあって、周りに海がある感じ。少なくとも自分はこんな愉快な形の大陸を見たことがない。

「あ、大陸じゃなくて、島なのかも」

それなら簡単に説明が付くよね。島だったら自分が知らないだけで、こんな形の島もあるかもしれない。

「でも、何か分け分けたみたいのされてるみたいだし…。普通島をこんな区切ったりしないよね」

そうなのだ。何か区切ったところ一つ一つに、名称が細かく書いてあるみたいだし。読めないけど。

「せめて、文字が読めたら分かるんだけど…ん？」

目の前にステータスが出てきた。

「言語理解、開放するのに5ポイント必要です、か。もしかしたら、文字覚えなくても出来るようになるのか？」

俺はルンルンした気分で、いつの間にか取得していた新しいポイントを振り込んでみた。ポイント、いつの間に加えてたんだろ？まあ、いいか。余裕があったら調べよう。

とりあえず、この簡単そうな本を読んでみよう。

「えーと、どれどれ？ …でも…かる…の…い…」

題名からして全く分からーん！！表紙はなんか、絵本みたいな感じで、ちっちゃなサルみたいな動物があっかんべーとしてる絵があるから簡単だと思ったんだけど、虫食いみたいにしか読めない。

「言語理解の数値を上げてみれば大丈夫かな？」

俺は残りの7ポイントを全て言語理解に振り込んでみた。

「えーと、猿でも分かる魔法の使い方かあ…。漢字の部分だけ分かったみたいだね」

言語1じゃそんなもんだよね。ああ、弓を思い出すよ。。。

「気を取り直して、さて、何が書いてあるのかな。あんま痛いこと書いてないといいな」

とりあえず読んでみる。3ページほど読んで、俺は見なかったことにして静かに本を閉じ、本棚に戻しておいた。

「ふう……、地図でも見よう」

あまりに大真面目に魔法の使い方について説明してあったので、ちよつと混乱してしまったみたいだ。この本を書いた人のことを想って心が痛んだ。

「地図なら客観的に書いてあるはずだし、大丈夫なはず」

そう言っただけ俺は地図を読み始めた。

「国…の名前がいくつかと、後地名とか街の名前とか書いてあるみたいだね」

俺は地図に向けていた目をあげると、そう結論づけた。

「こうなってくると島じゃなくて、ホントに大陸っぽいなあ」

自分はどこに飛ばされたのだろうか？

「もしかしたら、違う世界なのかもね」

神隠しっていう位だから、そんなに簡単に帰れないかなとは思ってたけど、世界が違うかもしれないとは。

「こりゃ確実に留年かな……。はあ」

自分が通っている大学のことを思い、俺はため息をつくのだった。

レベル	2	経験値	25	次のレベルまで	45
力			8.8		
防御力			9.9		
速さ			27.5		
体力			11		
運の良さ			8.8		
賢さ			17.6		
言語理解			8		
直感			50.6		
弓技能			1.1		
振り分け可能ポイント	3				

装
備
な
し

五話（後書き）

大体、ステータスは10で一般人レベルと置いていただければ。

六話（前書き）

説明不足のところが多いなあ。。。でも、直したりするとこの勢いが無くなりそうなので、出来るところまでやってから考えます。

六話

それから3ヶ月、俺は筋トレとか槍とか剣を振り回したりしつつ（初めて見たときから使ってみたかった）、行動範囲を広げていた。

その結果分かったことは、家から半径5キロ以内には人っ子ひとりいないということだった。

どうやら、この家の持ち主はよっぽど人と関わり合いになりたくなかったらしい。

どこの世界にも引きこもりっているんだね。

「しかも、5キロとは限らないんだよね」

背の高い木があったから登って周りを見渡してみたら、視界の果てまで全部森だったからね。

その光景見たときは軽く絶望したけど、代わりに川を見付けたのは良かった。

これで魚も食べれるね！

どうやらこの家の水もこの川から引いてるみたいで、飲み水にもなるみたいだ。

何しろ、何も考えずに毎日ごくごく飲んでたし。お腹壊したりもしなかったよ？

ただ、トイレの水もそこに流れていると知ったときは、絶対下流で魚を獲るのは止めようと思いました。

「とりあえず、人と会うのはそのうちにするとして……、今は体を鍛えるのが先決かな」

この間、ついに狼みたいな群れにあったのだ。

嫌な予感はしたのだが、速く動けるからって調子に乗ったのだ。

あの圧迫感は半端なかった。

逃げ足が速くて良かった。

速さを上げたのは間違いなかったのだ。うん。

あいつらに襲い掛かれても返り討ちに出来るようになってからじゃないと、安心して移動できん。

いや、直感があるから会わないようにも出来るんだけど、何か嫌じゃん？

たかが犬のちょっとしたでかくなっただやつの癖に生意気というか。

次会ったら、鼻っ面を叩き折ってやるんだ。

そして、ステータスをちよくちよく見ていて気づいたのだが、どうも能力値は鍛えれば鍛えるほど伸びるみたいだ。

振り分けポイントは、よく分かん。

狩りとかしてると結構上がるみたいだけど…。

そんなわけで、今はこんなステータスになっている。

レベル	3	経験値	80	次のレベルまで	70
力			15	2	
防御力			11		
速さ			31	4	
体力			13	2	
運の良さ			9	8	
賢さ			19	4	
言語理解			9	9	
直感			59	1	
弓技能			1	2	
剣技能			3	3	

槍技能

18 / 7

魔法

2 . 2

振り分け可能ポイント 7

装備 槍

槍とか剣とか振り回してみただけど、槍の方がリーチ長くて獲物により近づかなくて済むからポイントを振ってみましたw

今は槍ばかり振り回しています。ポイント振ったおかげか結構様になってる気がするんだ。

後、魔法！ 槍振り回しているときに、もしかしたら使えるかな？と思ったら項目が出てきたので、開放させてみましたw

メラって唱えたら、マッチの火位の火が出るようになったよ（超笑顔）。

楽しくて仕方ありません。

もし今すぐ帰る方法が分かったとしても、もう少し堪能してからにしよう。

「今はメラゾーマではない。メラだ」とか言ってみたいしね。

こんな感じで元気になっています。

あ、ちなみに今日20歳になりました。

一応日付確認してたんだ。

お酒どうだと飲める歳になったけど、お酒なんてないしなあ…。

果物でも搾って、ジュースにして飲んでみようかな。

誕生日だし。

とっておきの鹿っぱい動物の肉でも食べよう！

ではまた会いましょう。

六話（後書き）

レベルが上がるともとの能力値の10分の1上がる感じで。

七話（前書き）

そろそろ勉強しないと…さすがにヤバイなあ

七話

この大陸に住んでいる動物は、かつての世界にいたときにいた動物に似ているものもいるが、よく見てみると似ているが違う動物だということに分かる。

三木が兎や鹿、狼と呼んでいるものも、兎は前歯が異常に長いし、鹿は角が光っている。

狼に至っては1m以上の大きさがあつたりした。

そんな訳で、生態系が違っているのだから、地球にもいない生物がいたとしても可笑しくないということが言いたかったわけである。まる。

という訳で、あれから半年が経ちました。

ステータスも、もりもり上がって今では狼10匹程度なら軽くあしらえるようになりました。

はい、立派な人外ですね。

メラも今では顔の大きさの火の玉が出るようになったし、何か達成感があるよね。

新しい能力としては、肉体操作を開放してみましたw

だって、髭とか凄いことになってたんだもん。

髪はナイフとかで切れるからいいけど、髭は剃れないし。

20位上げて、髭を少しづつ失くしていきました。

お陰で、俺の顎はいつもツルツルだぜ。

将来、髪の毛の心配もしなくていいし、何て便利な能力なんだ！

「でも、着る服はどうしようもないんだよなあ……」

ここに来たときに着ていた服はもうぼろぼろだ。

まあ、こんな生活してたらすぐぼろぼろになるよね。

「早く人と接触しないと、着る服が無くて会うことが出来ない、何てことになるかも……」

それは嫌だな。なんてことを考えていると、玄関からガタツと何か音がしたのを聞いた。

俺は近くに立てかけておいた槍を手にとると、そつと扉の横に立ち、

様子を窺って見た。

「…何の音もしないな…」

以前狼が来たことがあったのだが、その時は扉を開けようとがりがりやってたのでそれとすぐ分かったのだけれども。

「開けてみるか…」

俺は扉の正面に立たないようにドアノブを捻り、足で蹴ってドアを開けた。

同時に槍を構えてドアの外に穂先を向ける。

「何もいない…?」

果たして、目の前には狼や動物の姿はなかった。

そして、安堵のため息をついた俺は視線をついと下に向け、そこでうつ伏せで倒れている小さな生物を発見したのである。

「た、助かりました」

と目の前で、凄い勢いで俺謹製の鍋を食べている小さいやつがのたまった。

「いやいや、こつこつのはお互い様だって。行き倒れなんて大変だったな」

そうなのだ。

この小さい生き物は、仲間とはぐれて迷った拳句に、家の前で力尽きてしまったようなのである。

名前は、ヤノプ。種族をドワーフというらしい。

…まさか、ドワーフがいるとは。これは本格的にファンタジーの世界のようだ。

「しかし、ドワーフだったら、力強そうだし、その辺の動物でも狩れば良かったんじゃないか？」

「それがですね…。ちょうど新しい鉱山を見付けて下調べに行つて来た後、キラーアントに襲われて腕を怪我してしまって…」

そう言つて、右腕の二の腕を見せるヤノプ。気付かなかったけど、意外と傷深いな。後で治療しておこう。

キラーアントは多分この間見たでっかいアリのことだろう。

虫がでかくなると気持ち悪いよね。

「それは大変だったな。しばらくゆつくりしていくといいぞ。食料もたっぷりあるし」

「ありがとうございます。それじゃあ、傷が治るまでお邪魔させていただきますね」

いや、久々に人と話すことが出来てちょっと浮かれてるな、俺。人じゃないけど。

それにこのヤノプから色々情報を聞けるかもしれない。

そんなことを思いながら、俺は一緒に鍋を食べ始めるのであった。

レベル	6	経験値	352	次のレベルまで	98
力	3	2	8		
防御力	2	2			
速さ	7	4	8		
体力	5	2	8		
運の良さ	1	8	2		
賢さ	5	4	4		
言語理解	1	8	4		
直感	1	0	8	7	
弓技能	8	3			
剣技能	1	4	2		
槍技能	8	2	8		
短剣技能	2	4	6		
魔法	5	4	2		
肉体操作	2	6	8		
振り分け可能ポイント	3	2			
装備 槍					

八話（前書き）

プロットはもう最後まで出来てるんだけど、書いてると変な方向に行ったりするなあ。全然進まないし。慣れなのかな、この辺は。

八話

「ふうっと」

ザシュっという音と共に最後の狼の首を刎ね飛ばした俺は、穂先に付いた血を振り落とし、一つため息をついてヤノプの方を振り向いた。

辺りには狼どもの首なし死体が転がっており、どこの地獄絵図？という有様だ。

「さ、行くっぜ。このまま真っ直ぐでいいんだろ？」

「…あ、はい。示針器はこのまま真っ直ぐを示しているので大丈夫ですけど…。三木さんって、実は凄い人なんですね。ウォーリアーウルフをこんなあっさりやつつける人初めて見ましたよ」

ヤノプは感心した様子で頷いていた。

まあ、最近は大抵の動物を瞬殺してるしなー。

我ながら出来すぎだとは思っけど。

最初は挑んで勝てないと分かると逃げ帰ってたし。

成長したもんだ。

ちなみに示針器は、魔力を使った道具であらかじめ登録していた場所を指し示すものらしい。

人間とかも使っている割とポピュラーなものようだ。

クリアアントから逃げる時に壊れたみたいで、使えなかったのだが家にたまたま道具があったみたいで直せたみたいだ。

… たまたまかは分かんけど。

何でもあるな、あの家。

今更言うことでもないと思うが、俺はヤノプと共にヤノプが住んでいるという村に向かっている。

独りでは大変だろうと思ったのでこうやって護衛みたいなことをしているのだ。

何かお礼もしてくれるみたいだし。

後、少なからず人間との交流もあるみたいなので、色々便宜を図ってもらえたらなーなんて考えている。

ドワーフの細工物は、人間のうけがいらしい。

「後、どの位かかりそうなんだ？そろそろ野宿も辛くなってきたんだが」

すでに野宿生活3日目だ。

周りを警戒するのも辛い、ベットで寝れないのが一番辛い。

「もうすぐですよ。今日の夜には着くと思います」

「よしー！ベットが俺を待っている！」

「じゃあ、さっさと行こうぜ！今日は夜になっても強行軍だな」

「はい。松明もありますし、着いてから休むことにしましょう」

「そう言って、俺たちはちょっと早歩きで先に進むのであった。」

「ドワーフの村」

「うわぁ…、洞窟の奥にこんな地下空洞があるなんて…」

俺は思わず見とれてしまっていた。

入り口から下の様子が見えるのだが、広く開けた地下空洞の壁にそれぞれの家が掘ってあるらしく、点々とした明かりがきれいなのだ。

思った以上の村の規模でびっくりした。

「ふふつ、中々キレイでしょう？ あぁ、足元に気をつけてくださいね。いくら三木さんでも落ちたら死にますよ？」

ぶっそんなことを言われて、ようやく俺は自分の足元に意識がいった。

「うおお！！めっちゃ断崖絶壁だし！」

危ない危ない。ミンチは嫌だ。

それから俺は案内するヤノプに恐る恐る付いて行くのであった。

レベル	6	経験値	366	次のレベルまで	84
力			33		
防御力			22		
速さ			751		
体力			537		
運の良さ			182		
賢さ			544		
言語理解			184		
直感			1107		
弓技能			83		
剣技能			142		
槍技能			831		
短剣技能			246		
魔法			542		
肉体操作			269		

振り分け可能ポイント

3
5

装備
銃

八話（後書き）

試験が終わったら思いっきり書こう。そうしよう。

九話（前書き）

勉強やる気なし

九話

「おお、ヤノプじゃねーか！お前生きてたのか！ てっきりくたばったかと思ってたぞ」

しばらくヤノプの後を金魚の糞のようについていくと、小さなお髭がダンディーな親父と鉢合わせした。

親父はヤノプのことを心配していたみたいで、ヤノプも嬉しそうに受け答えしてる。

うんうん。良かった良かった。そしてこの親父筋肉が半端ねえな。

「それで、こちらが三木さんで、私が行き倒れてるところを助けて頂きました。お礼をしたかったので、村に招待しました」

三木さん、とヤノプが目で促すような仕草をしたので俺は一步前に出る。

「どうも、始めまして。三木智也といいます。しばらくヤノプの世話になると思うので、見かけたら声掛けてやって下さい」

よろしく願いします、と俺が声を掛けると

「おう、よろしくな兄ちゃん！俺は、バリスってんだ。ヤノプの恩人ってことは俺にとっても客のようなもんだ。ゆっくりしていつてくれ」

がははと笑いながら、俺の腰辺りを叩くバリスさん。

ヤノプより全然ドワーフっぽくて何か安心した。

ヤノプってドワーフっぽくないんだもん。

言葉遣いとかめっちゃ丁寧語だし。

「それじゃ、バリスさん。私たちは長老のところに顔を出さないといけないので、これで失礼しますね。また明日にでも」

「おう、疲れてるだろうしな。長老のそこ行ったらとっとと休め。また酒に付き合えよ」

兄ちゃんもじゃあな、といってバリスさんは去っていった。

「さ、じゃあ行きましょうか」

「おう」

その後も何人が声を掛けられながら、俺たちはドワーフの長老の家に向かった。

「なあ、長老ってどんな人なんだ？ やっぱ長い髭を持つ爺さんだったりするのか？ 怖かったりするか？」

俺の中ではドワーフの長老なんていったら、そんなイメージしか思い浮かばない。

「はは、緊張しなくても大丈夫ですよ。確かに長い髭のお爺さんだったりしますが、穏やかな方ですし。今年で3120歳だったかな？家の村で一番長生きの方です」

「はあ！？3000って…。ドワーフって凄い長寿なんだな…ってことはもしかしてヤノプも意外と歳食ってたりするのかな？」

「私はまだ112歳になったばかりの若造ですよ。ようやく成人として認められた位の歳です」

とヤノプは苦笑してそう答えた。

…俺、ヤノプとかにめっちゃタメ口きいてるんだけど、改めた方がいいのだろうか？

いや、今更変えても変だよな。それにヤノプだし、許してくれるだろう。

なんてことを一言聞けばいいのに、心の中で自問しながら歩いていると、どうやら着いたようだった。

「長老。ヤノプです。ただ今帰還しました」

とドアをノックしながらヤノプが長老を呼ぶ。

そして、ドアが開くとそこには予想通りとでもいうか髭が地面に付きそうな程長いドワーフの老人が出てきた。

「とりあえずは、無事に帰ってきたみたいで何よりじゃ。よく帰ってきたのう」

長老が好々爺のような笑みを浮かべてヤノプに話しかける。

今の俺たちはリビングのようなところで、小さな椅子にテーブルを挟んで長老に向かい合って座っている。

椅子が小さくて落ち着かない。

いや、全体的に小さいのだ。

この分だとベットも小さくて寝れなそうだと俺は一人溜め息をついた。

「心配をお掛けして申し訳ありませんでした。クリアアントに襲われて、そのまま皆と逸れてしまいました…」

「うむ、それは帰ってきた者から報告を受けている。お前以外は皆帰ってきているぞ」

ヤノプは安堵の溜め息を一つつくとそのまま続ける。

「襲われた後は、食料が尽きて行き倒れてる時にこちらの三木さんに助けて頂きまして…。彼の助けを借りて何とか帰ってこれた次第です」

二人の視線が俺に集まる。

俺が口を開こうとする前に長老が俺に話しかけた。

「ふむ。三木どのといったかな。この度は我等の同胞を助けて頂き、ドワーフ一族を代表して感謝を申し上げる。何かお礼を差し上げなくてはいけないな。何か望みはあるか？出来る限り要望に応えよう」

長老はじつと俺を見つめて俺の答えを待っている。

…何か緊張するな。

「それでは、人間についての情報を教えてもらえないでしょうか？
故あって人と関わらずに森で生活していたので、知っていることを
教えてほしいのです。後、もし人と何か伝手があるのでしたら、私
が人の社会に入れるように便宜を図って欲しいと思っています」

長老は頷きながら、

「それならば容易いな。この村と交易を行っている商人と連絡を取
ってみよう。それまではここでゆっくり羽を伸ばすといい」

そう言つて長老は相変わらずの笑顔を俺に向けるのであった。

レベル	6	経験値	366	次のレベルまで	84
力			33		
防御力			22		
速さ			75		1
体力			53		7

運の良さ	1	8	2
賢さ	5	4	4
言語理解	1	8	4
直感	1	1	0
弓技能	8	3	7
剣技能	1	4	2
槍技能	8	3	1
短剣技能	2	4	6
魔法	5	4	2
肉体操作	2	6	9
振り分け可能ポイント	3	5	
装備 槍			

九話（後書き）

文章、少しは読み直しかしたほうがいいかな？ でも、後ろを振り返ると勢いが止まりそうだしなあ…。

十話

翌日。ヤノブの家に泊まらせてもらった俺は、貪るように睡眠をとった後、今ヤノブと遅い朝飯を食べている。

「いやゝ、長老が人間用の大きさの布団持ってて助かったよ。最悪座って寝ることも考えてたからなあ」

「人間の商人がたまに泊まることもあるので、用意してあったんですよ。ドワーフ用のは三木さんには小さすぎますからね。良かったです」

周りにあるもの全てミニチュアみたいな感じだしなと、チラッと周りを軽く見回してみる。

ランプも、食器も、家具類も全部俺が使うには一回り小さい。

「ところで、三木さんはこの後何かしたいこととかありますか？商人たちと連絡取れるまでは時間あるでしょうし」

「んーそうだな。とりあえず、服が欲しいかも。皮の鎧とか着て誤魔化してるけど、服とかボロボロのしかないんだ。後は槍を新調できたらな、なんて考えてる」

人間らしい生活送るためには服は必需品だよね。槍はずっと使い続けているせいか、耐久力的に心配なんだよ。

「それだったら、任せてください。食べ終わったら知り合いに頼みに行ってみましょう」

その言葉を聞いて安心した俺は、キノコなどが中心の朝飯の残りを食べ始めた。

「しかし、悪いなあ。何かめっちゃいっぱい生地使うみたいで高いんじゃないのか？」

「いいんですよ。この村にいる間はお金のことは気にしないで下さい」

先ほど、服職人であるドワーフのところに行っただが、お金をヤノプが払ってくれたのだ。

一応、あの家に置いてあった金貨は持ってきてるので多少は払えるんだけど…。

ここを出るときにこっそり置いていこうかな？

「次は、槍ですね。武器とか作っている人は多いんですけど、一番腕のいい人のところに行きましょうか。ほら、昨日三木さんも会ったあのバリスさんです」

「へえ、あの人が」

意外、というほどでもないか。

筋肉凄かったし。

いや、筋肉はそんなに関係ないか。

「バリスさんは結構入り口に近いところに住んでいるので、ちょっと歩きますよ」

「りょくかい」

あの髭つてやつぱり自分で整えてるんだろうか？とかそんなことを考えながらまた歩き始めた。

「バリスさん。おはようございます。今日はちょっとお願いがあらってきたんですけど」

ヤノプがそう呼びかけると、明らかに寝起きと思われるバリスさんが出てきた。

「おお、ヤノプか。どうした？　俺はまだ寝たりないんだが」

「すみません、起こしてしまったようです。実はこの三木さんが槍を新調したいとのことで、バリスさんをお願いしようかと思ひまして」

それを聞いたバリスさんは幾分か仕事モードに入ったようで、

「槍か。ちよつとおまえさんが持っているやつを見せてみる」

と俺に視線を遣してきたので、俺は槍をバリスさんに手渡した。

「ふむ、大分使い込まれてるな。古いものだし、確かに新調した方がいいかもしれん」

と職人の目をして槍を検分して言った。

「それで、どんな槍がいいとか何か希望はあるか？ヤノプの恩人だからな。出来る限り叶えてやるぞ」

俺はちよつと考えて、

「そうですね、出来る限り耐久力があるのがいいですね。後、出来る限り重くしてもらえると助かります」

武器がなくなると後は逃げるしかなくなるしなあ。

後、力はこれから先どんどん付いていくだろうから、軽いと頼りないのだ。

「そうか。耐久力のほうは、秘蔵の鉱石を使ってやるとして、重さの方は…調節しないといけないな」

とバリスさんは俺の体格をチラと見て言った。

「ドwarfが武器用に使う重鋼石という鉱石があるんだが、これがかかなり重くてな。ちよつと混ぜただけで見た目にそぐわぬ重さになる」

「これでも見た目よりは力はあるほうなので、是非それを使つてくれませんか？」

残りの振り分け可能ポイント全部使つてもいいし。

「うむ。まあ、どれだけの量を混ぜるか決める為に力を測つてみるとするか。ちよつと待つておれい」

しばらくして、バリスさんは幾つかの大きさの違つ黒光りする石を持ってきた。

「これが重鋼石だ。小さい方から持ち上げてみる」

俺は、掌に納まる程度の石を持ってみた。この重さからいうと、5
0キロ位はありそうだ。

「よし、次」

次に握り拳大の石を持ってみる。100キロくらいかな？

「どうだ？まだいけそうか？槍にして振り回すことを考えて決めろ
よ」

「はい、もっと重い方が助かりますので次いってみます」

次は両手で収まるかどうかといった大きさだ。目測からいって20
0キロ以上はあるな。

100キロでも余裕はあったけど、一応ポイント振っておくか。

俺はポイントを力に全て振ると、石を持ち上げた。

「…まだ余裕があるみたいだな。ちょっと待っている。もうちょっと大きいやつを持ってくる」

そう言って家に入って戻ってきたバリスさんの手元には両手で抱えてもたないといけなくらいの大きさの石があった。

「全く。人間で並みのドワーフ以上の臂力があるやつがいるとはな。お前、ホントに人間か？」

俺は苦笑しながら、

「ちょっと力が強いだけのただの人間ですよ」

と答えた。

そして、バリスさんの持ってきてくれた石を持ってみる。

500キロくらいかな。

たぶんこれ位がちょうどいい気がする。

「バリスさん、この石位の重さがちょうどいいみたいです」

「はあ、分かった。色々と言いたいことはあるが、ちゃんと作ってやる。急いでも半月はかかるが大丈夫か？」

半月もかかるのか。ヤノプに負担がかかるのが心苦しいがしょうがないか。

お金を長老に渡しておいてヤノブに渡してもらおう。

俺が直接渡しても貰ってくれないだろうし。

「ありがとうございます。それでお願いします」

と俺は頭を下げて頼むのだった。

レベル	6	経験値	368	次のレベルまで	82
力			88.3		
防御力			22		
速さ			75.1		
体力			53.7		
運の良さ			18.2		
賢さ			54.4		
言語理解			18.6		
直感			110.7		
弓技能			8.3		
剣技能			14.2		

銃技能	短剣技能	魔法	肉体操作	振り分け可能ポイント	装備なし
8	2	5	2	0	
3	4	4	6		
1	6	2	9		

十一話（前書き）

勉強進まねえ
∴ o r z

十一話

それからこつそり長老にお金を渡しておいた俺は、本を読んでこの世界の知識を蓄えたり、体を鍛えたり、ドワーフの戦士達と模擬戦をしたり、ヤノプの鉱石を取りに行く仕事を手伝ったりして時を過ごした。

そして、一週間程経ったころ、俺は長老に呼び出された。

どうやら件の商人が来たらしい。

「長老、三木です。入りますよー」

最近は長老に対する接し方が大分砕けてしまっている気がする。

だって、長老優しいんだもん。

直さなくっちゃなあ。色々とお世話になってるし。

家の中に入ると、長老と人の良さそうな顔をしたおじさんとその護衛っぽい厳ついおやじが2人いた。

この人たちかあ、と人となりを観察していると、おじさんの方が立ち上がって声を掛けてきた。

「初めまして。私はキース・ヘキサグラムといいます。あなたが三木さんでよろしいですか？　長老から話は伺っていますよ」

「キースはこいつの祖父の代から付き合いのある商人の家系のやつで。今回大事な用件があるということであって来もらったのだ。人の良さそうな顔をしているが、一応顔役だぞ？」

と長老が口をはさんだ。

ああ、やっぱり見かけ通りの人じゃないんだなと思いながら、俺も自己紹介をする。

「こちらこそ初めまして。わざわざ来ていただいてありがとうございます。長老の方から話を伺っていると先ほどおっしゃっていましたが…」

とちらりと顔を伺う様にキース氏を見してみる。

どこまで話が伝わってるか分からないから、キース氏に話を進めてもらおう。

キース氏は特に何も気にせず一つ頷くと、

「はい。保障が欲しいということで、私の方でも考えてみたのですが、三木さんは槍の名手と話を伺いましたので、とりあえず我が商会の護衛として雇うというのはどうかと思っています。傭兵としても働くこと自体は出来るとは思いますが、何事も信用というのは大事ですからね。もちろん給金も払いますし、護衛の仕事をしなくても大丈夫になったら、いつでも辞めてもらって結構です。お嫌でしたら、別の方法も考えてみますが…」

「いえ、それは願ってもないことです。ずっと所属するというのは性分ではないので出来ませんが、しばらく厄介になりたいと思います」

俺は一もなく答えた。

確かに傭兵とかが自分には向いてると思うけど、信用って大事だし。

商会で護衛として雇われてたというだけで、ある程度の信用が出来るだろう。

「決まりですね。それでは商談が済んだらこのまま街に向かいますが、大丈夫そうですね？」

「えーとですね…、実は槍を新調してもらってるので、槍が出来たらまた取りに戻らないといけなくなるのですが…」

まだ後2週間位かかるって言われてるからなあ…。

服の方は2着ほど作ってもらって、今もう着てるけど。

「それなら大丈夫ですよ。ここに来る商隊の護衛をすればいいのですから。ここにいる位なので最低条件は満たしですし」

「最低条件？」

どういうことだ？

「この村には少しでもこの村に対して害意がある人は近づけないようになっているんですよ。長老から聞いていないんですか？」

初めて聞いたよ、おい。

と長老を見るとこちらに向かって片目を瞑って見せた。

流石、3000年生きてるだけあってただの優しい爺さんじゃないんだな。

ウインクとかお茶目過ぎる。

後でどうやってるか聞いてみよう。

まあ、ヒントくらいしか教えてくれないだろうけど。

この村を守る要みたいなものだろうし。

「商談がまとまって荷物を運び終わるのは明日以降になると思いますが、それまでにやり残したことがあったら済ませて置いてください」

「分かりました」

と俺は答えると、それではよろしく願いしますと頭を下げて部屋を辞させてもらった。

さて、ヤノブもそうだけど、この一週間で仲良くなった人に挨拶しないとな。

あ、バリスさんにもいったん村を出るけど、また槍を取りに戻ってくるって一言伝えておかないとなー。

後、まだ読んでない本があるし…。

やることがいっぱいあるぜ。

人との生活も楽しみだな。

色々な本を読んでみたけど、どうやら中世のヨーロッパのちょっと魔法文化も発達した感じみたいだから、俺みたいな出生不明なやつも比較的溶け込みやすいかなと思う。

何にせよ楽しみだ。

レベル	経験値	次のレベルまで
6	408	42
力	94.6	
防御力	28	
速さ	81.4	
体力	58.6	
運の良さ	18.4	
賢さ	58.6	
言語理解	22.4	
直感	112.3	
弓技能	8.4	
剣技能	14.6	
槍技能	89.1	
短剣技能	25.8	
魔法	56.3	
肉体操作	27.9	
振り分け可能ポイント	8	
装備	槍	

十二話（前書き）

セリフ変えました。セリフ変えたら、キャラ全然変わりますね…。

十二話

「それじゃ行つて来るよ。色々ありがとうな、ヤノプ」

「いえ、私は受けた恩を返しただけです。再来週またお待ちしますね、三木さん」

俺はヤノプと最後に軽く話すと、キースさんたちが待つてゐる馬車に向かつて歩き始めた。

再来週また来るんだから見送りはいらないうて言つたのに律儀なやつだ。

俺が馬車に乗るとそれを合図に馬車が動き始め、ヤノプが見えなくなるまで手を振り続けたのだつた。

馬車は全部で3台あり、真ん中に荷物とキースさんたちを乗せた馬車、それを挟むように護衛が乗つてゐる馬車といった具合になつて

いる。

ドワーフとの交易品を狙う輩が数多くいるため、このように護衛が
たくさんいるのだ。

村には数人だけ入って、残りは入り口付近で野営しているらしい。

そして俺はその一番後ろの馬車で自己紹介をしていた。

「はじめまして。俺は三木智也という。呼び方は三木とでも呼んで
くれ。得物は見ての通り槍だ。よろしく頼む」

何かこう注目されたりすると、見栄張って口調が固くなるな…なん
てことを考えていると、周りも次々に自己紹介を始めた。

まとめると、俺と同じ黒髪で大柄な男がケンで得物は斧。

金髪でイケメン優男がタリスで得物が双剣。

金髪でちょっとタレ目がキュートな魔法使いのエレナ。

赤髪でポニーテールどことなく取っ付き難そうなクールビューティー剣士のリン。

長いストレートの緑髪で豊かな母性を感じさせるものをお持ちな弓使いのサラ。

こんな感じかな？

え、男の説明が何か荒くないかって？

そりゃ、みんなだって男の詳しい説明なんか聞きたくないだろ？

つまりそついうことだ。

しかし、女の子が3人もいるなんてラッキーだった。

一番前の馬車には男しか詰め込まれてないらしいし。

どっちかって聞かれて直感で答えたのが良かったな。

最近は命の危機以外でも直感が働くようになって良いことが続いている気がするぜ。

出身とか聞かれたら、記憶喪失で彷徨ってドワーフに保護してもらったとか言って適当に誤魔化しながら雑談をしていると、楽しそうに笑っていたエレナが何かに気付いたかのようにサッと顔色を変えた。

「敵よ！前方から30ほど敵対戦力接近中！すぐ鐘を鳴らして！」

エレナが言葉を発し終わる前に御者が鐘を鳴らし、俺たちは武装をして外に飛び出した。

外に出ると、遠くからでっかいアリの群れが砂埃をあげてこちらに向かってくるのが見えた。

周りは荒野なので、視界は良好だ。

クリアントか…。

しかし、エレナの索敵の魔法は便利だな。

今度教えてもらおう。

「馬車に近づく前に片付けるぞ！ 各馬車一人残して全員続け！」

ケンが指示する。

どうやら全体の指揮官っぽい立ち位置らしい。

ごめん、自己紹介適当に聞いてて。

みんなに続いて俺も走っていく。

…みんなチームワークみたいなのあるだろうし、俺はフォローに回るか。

一人だったら十秒かからないで片付けられると思うけど、点数を売っておこう。

そして、俺は一人に付き一匹で相手出来るように、アリを誘導しつつ一匹づつ数を減らしていった。

「三木、お前なかなかいい腕してるな！ 正直、お前の槍の動き見えなかったぞ。周りの動きもよく見てるし、無駄のない戦いだった」

とケン俺の背中をバンバン叩きながら言った。

「最初は頼りなさそうな人だと思ってたんですけど、人は見か

けによらないんですね」

と笑顔でサラリと腹黒を匂わせる発言をするエレナ。

そうか、笑顔で喋っていた時も、そんなことを思っていたんだね？

「まあまあなんじゃないん？」とタリス。

「期待以上だった。今度ぜひ手合わせしてくれ」

と、目を戦闘の興奮が収まっていないのか、ギラギラさせているリン。

…おう、この人目が怖い。

戦うのが趣味なのだろうか？

サラさんは、その様子を見て可笑しそうに笑っている。

笑ってるだけなのに女の子の中で一番まともに見えてくるのは何でだろう。

戦闘前よりも賑やかになった馬車の中で俺は、やっぱり人との関わりっていいなあとちょっと前までの自分を思い出しながら会話に興じていった。

レベル	6	経験値	440	次のレベルまで	10
力			97	1	
防御力			28		
速さ			83	2	
体力			59	4	
運の良さ			18	4	
賢さ			58	6	
言語理解			22	6	
直感			112	5	
弓技能			84		
剣技能			14	6	
槍技能			90	5	
短剣技能			25	8	

魔法	5
肉体操作	6
振り分け可能ポイント	3
14	
28	
装備 槍	

十三話（前書き）

うう、キャラが一定してない気がする…。一区切りついてから…そう、現実でも、小説の展開でも、一区切りついてから色々調整します（汗）

十三話

ドワーフの村を出て、もうすぐ夜になろうという頃、森の入り口付近で野営することになった。

本格的な野営は初めてだから、何をすればいいのか分からなくてあふたしますw

「はい、三木。何もすることないなら、こっち手伝ってよ」

振り向くとエレナが笑顔で俺に手招きしていた。

馬車の中で喋っているうちに、素を出しすぎて見事弄られキャラになっちゃったんだ。くそ。

こう尊敬を集める感じでいきったのに、Sの人には匂いが分かるんだろ。すぐ看破されたぜ。

今じゃみんなからタメ口で話されてる。

「何をすればいいんだ？ 正直集団で野営なんかしたことないから、俺は役に立たないけど」

「大丈夫大丈夫。干し肉とかだけだと味気ないから、何か獲物とってこようと思つてさ。私が索敵で見付けるから、三木が狩つてよ」

なるほど。それなら俺でも出来そうだね。

「了解。ちょっと槍取ってくるから待つてて」

俺は急いで槍を取りに馬車に向かうと、立てかけてあった槍を手に取りエレナの元へ急いだ。

「早速発見。ここをまっすぐ行つたところに、鹿の群れがいるわ。」

三木、よろしく」

しかし、ホントに便利だな。索敵。教えてくれないかな？

「じゃあ、行ってくるよ。2頭位あれば十分かな」

俺は地面を強く踏み込むと、森の奥に飛び込んでいった。

木にぶつからないようにスピードを抑え目にして走っていくと、確かにエレナの言う通りに鹿の群れがいた。

ちょうど開けた場所だったので、スピードを上げる。

この時点で鹿達は俺に気付いていたが、動き始める前に俺は近くにいた2頭の鹿の頭を刎ね飛ばした。

やっぱり速さは男の浪漫だよな。

初めてこの速さを手に入れた時は感動で思わず泣いてしまったけど。
逃げていく鹿達を背に、俺は2頭の鹿を引きずってエレナの元に戻
っていった。

「わ、早かったのね。って、全部首ちょんばだし…」

エレナは軽く引いているようだ。

突き刺すより、薙いだ方が動作が早いんだからしょうがないんだっ
て。

「ま、いいけど…。じゃあ、行きましようか」

頷きながら俺は、左手に2頭の鹿の足をまとめて持ってエレナの隣
に並んだ。

「エレナ、索敵の魔法って、教えてくれたりする？　すごい使い勝手良さそうだから、俺も覚えたいんだけど」

聞くのはただと思って聞いてみる。

「三木って魔法使えたの？　でも、生憎ただじゃ教えるつもりはないわよ。飯の種だし」

「もちろんタダとは言わないって。それなりに払うつもりだからさ」

「ふうん、それならいいけど。金貨30枚で先払いだからね」

金貨30枚…1枚日本円に換算すると10万円位だったはず。

こいつガチな支払い要求してきやがったorz

手元にあるのは金貨28枚……何とかそれ以下に……！！

「そこを何とか！20枚位で何とかならない？？ほら、友人価格でさ」

「駄目。30枚きつかり。あんまぐだぐだ言つと、金額あげるよ？」

エレナさん、その笑顔がこわいです。

その後、多少問答したのだが結局まけてもらえなかった。

俺、交渉とか向いてないのかな…。

野営場所に帰って腹いっぱい飯を食べた後くじに無事勝った俺は、見張りに就くこともなくぐっすり眠りについた。

一部俺を恨みがましく見てるやつもいたが、何も問題はない。

何しろ俺は勝者なのだからw

翌朝、起きてるか起きてないかの境の微妙なまどろみの中にあった俺は、誰かが俺を起こす声で起きた。

「やっと起きたか。武人ならすぐに反応しないと生き残れないぞ」

と目の前で赤い髪のお姉さんが不機嫌そうな顔を向けていた。

「おはよう、リン。俺、もしかして寝坊した？」

「いや、私がお用があつて起こしたのだ。それよりもお前、顔にペイントするのが趣味なのか？ 正直似合わないから止めたほうがいいぞ」

俺の顔を見ながらそうコメントするリンさん。

「は？何のことだ？」

いきなり寝起きに何を言ってるんだらうこの人は。

顔にペイントって、俺は昨日すぐに寝たのに。

リンはついと銅を磨いて作った鏡を俺の前に出した。

「え、何これこわい」

そこにはインディアンみたいなペイントを施された俺の顔があった。

軽く拭ってみると、何かの血みたいだ。

「早く顔を洗って来い。ホントはこんなことに大事な水を使うのはもってのほかだが、あまりにも見苦しい」

リンは追い払うような仕草をすると立ち上がった。

「顔を洗ったら、槍を持ってあの岩の所まで来い。軽く手合わせし
よう」

ああ、昼間に言っただやつか。戦うのが好きなんだなあと思いながら俺も立ち上がると、了解と答えた。

さて、じゃあ顔を洗ってこようかな。

レベル	6	経験値	443	次のレベルまで	7
力			973		
防御力			28		
速さ			836		
体力			596		
運の良さ			187		
賢さ			586		
言語理解			227		
直感			1129		
弓技能			84		
剣技能			146		
槍技能			908		
短剣技能			258		
魔法			563		
肉体操作			283		
振り分け可能ポイント			15		

装
備

鉄の
鎗

皮の
鎧

十三話（後書き）

逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ（ry

十四話（前書き）

2月になったら、俺、小説とか思いつきり書くんのだ…

十四話

槍を持って指定された場所に行くと、そこにはすでに剣で何かの型をやっているリンがいた。

演舞みたいで見応えあるなあ、としばらく眺めているとどうやら一区切りついたらしい。

「来たか。では、手合わせ願おう。準備はいいか？」

あ、そう言えば準備運動も何もしてない。

ちよつと待ってくれと俺は声を掛けて、屈伸・伸脚などいつもやっている準備運動を一セット終わらせ、槍を構えた。

「よし、いつでもいいぜ。仕事中だから怪我のないように終わらせようか」

「ああ。今日の所はお前の実力を確かめただけだから、無理はし

ないようにしよう」

……今日のところは？

ちよつと引つかかる台詞が聞こえたが、今は目の前のことに集中することにする。

リンが手に持っているのは、いわゆる西洋風の片手用両刃直剣で、今はこちらに向けて正眼に構えている。

出来れば向こうから攻めてきて欲しいな。

そうすればリンの剣の腕に合わせて相手出来ると思うし。

そう思つて俺が動かないでいるとリンは焦れたのか、地面を強く蹴つてかなりのスピードで俺の間合いまで踏み込み、そのまま剣を振り下ろした。

右肩口に向かつて刀身が迫る。

このまま何もせずにいたら俺は死んでしまふに違いない。

怪我のないようにって言ったのに。。。

俺は右足を一步引くと剣の横腹に槍を叩きつける。

耳をつんざくような音になり、火花が起こる。

俺は叩き付けた力を利用し、軽く距離をとる。

リンも流れた剣の力を利用して距離を開け、再び剣を構えた。

「リン、軽くのはずなのに本気で打ち込んできてない？ 普通の人だったら即死コースなんですけど」

俺はつきたくなるため息を飲み込んで問いかけた。

「そうだな。だが、お前は私の本気の攻撃を事もなくいなしてみせた。何も問題ないだろう？」

とにやりと笑うリンさん。

「私の見込んだ通りだ。本気を出しても勝てない相手なぞ久しく会ってないからな。私が勝つまで付き合ってもらおうぞ」

そうか。この人負けず嫌いでもあるんだね。

何で直感が働かなかったんだろう？

絶対これから面倒くさいことになるだろうに。

そしてリンは再度のダッシュで間合いを詰め、左斜め下から剣が迫る。

俺は槍を斜めに構え剣を受け止めた。

再度火花が散る。

が、リンはそれを予想していたようでそのまま次の剣撃に繋がっていく。

俺は上下から殺到する剣撃を捌き続けると、一旦仕切り直そうとリンの剣を大きく弾いて距離をとった。

「ふう、びつくりしたな。まさかさっきより早くなるなんて」

一番初めのスピードに会わせようとしてたから、ちょっと驚いたの

だ。

「退屈させない女だろ？私は。相手が強いほど強くなるんだ」

不適な笑みを浮かべるリン。

どこの主人公だよ、敵が強いほど強くなるとか。

でも……大体の実力は分かった。

「今度はこっちから行くよ。終わらせるつもりで行くから、頑張ってくれ」

俺はそう言つと、地面を猛然と蹴ると一瞬でリンに肉薄し、横向きに槍を薙ぐ。

狙いはリンが持つ剣だ。

リンは予想できなかったのか目を見開いて動こうとするが、遅い。

俺の槍はリンの手から剣を弾き飛ばし、そして俺は穂先をリンの喉元に突きつけた。

「俺の勝ちだな」

とリンに向かって笑いかけてやる。

「…ああ、私の負けのようだ。すまなかったな、こんな朝早くから」

「全くだ。今度からはただじゃやらないからな？こんな割りに合わないこと」

俺は穂先を降ろしながら答えた。

「そうか。それじゃ、今度から報酬を払おう。それほどの価値があった」

リンはどこか陶然と答えると、落とした剣を拾った。

「むう、まだ握力が回復しないぞ。女相手に酷いやつだ」

リンが口を尖らして俺に毒づく。あ、ちょっと可愛いかも。

「なんだよ。それが望みだったくせによく言うな。俺の実力が見たかったんだろ？」

「そうだな。これで私の次の目標が出来た。感謝するぞ」

リンは俺に正面から向き合つと目を合わせていった。

思わず目を逸らす。

改まれると何か照れるじゃんか。

「さ、さあ、そろそろみんなの所に戻ろうぜ。まだ時間があるならもうちょつと寝たいし」

俺は取り繕うようにそう言つと、リンを促した。

「ああ、行くか」

そんな俺に気付いているのかいないのかリンは俺の隣に並んで歩き始めた。

日はまだ昇り始めたばかりだった。

帰るとエレナが起きていて、俺のことをじとつと見ていた。

「二人でどこ行ってたのよ。こんな朝早くから」

「リンが手合わせしてくれていうからさ。それに付き合ってた」

俺は水がめにある水を柄杓で掬うと、口を付けて飲み干した。運動した後の水は上手いなあ。

ふーんと、エレナはどこか面白くなさそうな顔で応えると、急にニヤリとした顔になってこのたまった。

「そういえば三木、昨日気持ち良さそうに寝てたわね。私が見張りしてあげてた横でさ。軽く殺意沸くほどに能天気な顔して。疲れも取れて顔つきも良くなってたんじゃない？朝起きたときとかさ」

けけけけ、って声が聞こえてきそうな顔つきだ。

それにしても朝…？

「あ！あれお前の仕業か！悪趣味な真似しやがって！」

ようやく思いついた俺はエレナに詰めかかる。

「は？何の事言ってるかさっぱりなんですけど。何かあったんですか？」

とにやにやしながら惚けるエレナ。

くそ、現行犯じゃないから証拠がないのが痛いぜ。

未だににやにや笑いを止めないエレナを横目に、その内復讐してやろうと心に誓う俺であった。

レベル 7 経験値 458 次のレベルまで 92 レベルが7に上がった。

力	108
防御力	35.5
速さ	93.1
体力	65.9
運の良さ	20.6

賢さ	6
言語理解	4
直感	7
弓技能	1
剣技能	3
槍技能	4
短剣技能	3
魔法	1
肉体操作	0
振り分け可能ポイント	4
鉄の鎧	2
皮の鎧	1

十四話（後書き）

ちよつと多めに時間掛けて戦闘シーンとか真面目に書いてみました。
所詮俺が書けるのなんてこんなもんさ。 どうせ俺は中二病さ。

十五話（前書き）

もしかしたら、2月まで更新できないかも。まあ、時間見付けてちよこちよこ書けたらいいけどね。あ、主人公は外道ですので今回。途中で展開変えようかと思いましたが、結局突き進んじやいました（笑）

十五話

結局二度寝出来なかった俺は、その後そろそろ起き出して来た奴らと共に撤収作業を手伝った。

ああ、何か寝るタイミング逃したと思うと眠くなってきた。
はあ。俺はこらえきれずにあくびを一つすると、馬車に乗った。

予定では、目の前の森を抜けたら村があるそうでそこで2泊ほどするらしい。

村といっても、ドワーフの村に行くたびに経由するので商會が、宿屋に挺入れて立派なのがあるみたいなのだが。

ビバベツト。

ひゃっほーい。

しかしお腹空いたな…、みんな朝飯の話なんか一言も話題にしないんだけど、今日は朝飯抜きなのか？

そう思って聞いてみると、

「はあ？朝飯？どこの貴族様よ、あんた」

とエレナが噛み付くようにそう返してきた。

「普通、朝飯って食べないんだ」

と俺はちよつと驚きながらそう応えたと、

「当たり前だ。3食食べれるほど食料供給に余裕はないからな。食べるとしたらそれは貴族か、裕福な奴ら位さ。こんな常識も知らないのか？」

ふふんと前髪を弄りながらそうおっしゃるタリス。

こいつちよくちよく上から目線の言葉入れてくるよな。

それがなければ、結構聞いたことには応えてくれるし面倒見のいいやつなんだとは思っただけど。

ケンの野郎は俺たちの様子を見て、何か微笑ましそうな笑みを浮かべている。

お前は俺たちの父親か。

いや、そういえばこいつ一児を持つパパだったな。

奥さんとラブラブらしい。

というか、護衛隊の面々はほとんど妻帯者だ。

危ない職業だと思うんだけど、よく結婚しようと思うなあ。

独身なのは女の子たちと、タリスだけらしい。

俺はこんな感じで雑談を続けながら、エレナへの復讐方法について考えていた。

やられたらやりかえさないと。舐められるだろ？

そして、特に何事もなく夕方にはタギの村に着いた。

あ、ちなみにここの国の名前はメルキア王国というらしい。

俺が住んでた森一帯も含めて、ここら一帯を広く支配しているそう
だ。

しかし、あの森、人間は基本立ち入り禁止らしい。

何かとある女神様のおわす神聖な場所なんだと。

あれ？となると、あの骨の人は罰当たりな人だったんだな。

まあ、あの森で殺戮の限りを尽くしてた俺が言うことじゃないけど。

タギの村は、農業で生計を立ててる者がほとんどで小さな村といっ
たところだったらしいのだが、儲けている宿屋が依頼などをして村
に還元しているため、意外と賑わっていたりする。

傭兵らしきものもその辺を歩いていたり、堀や塀なども立ててあっ
て、なかなかお金がかかっているように見えた。

村の中心に位置している宿屋もホントに村の宿屋なのか？といった
具合に立派なものだった。

「おお、大分立派な宿だなこりゃ」

宿屋のガレージに馬車を入れ、そこから出てきた俺は宿を見てそんなことを言った。

部屋も期待できそうだと思う笑顔浮かべてしまう。

「そうだろそうだろ。3年前に改築したばかりだから、さらに新しくなったんだ」

ケンがどこか自慢げに答える。

俺たちはがやがやと宿屋に入っていくのであった。

酒を飲んでどんちゃんしながら、前の馬車に乗っていたやつらと友好を図り、ついでにエレナの話もちやっかり聞きだした俺はその場をこっそり抜け出してエレナを俺の部屋へ誘っていた。

「はあ？何で私があんたの部屋に行かないといけないのよ」

とかぶつぶつ言っていたが、何だかんだで来てくれる感触はあった。

部屋に酒瓶を大量に運び込むとそれを一本だけ残して隠し、ジュースも用意しておく。

そして、ジュースにうる覚えの魔法をゆっくり思い出しながらけた。

コップに注いで一杯飲んでみる。

しばらくして効果を確かめた俺は一つ頷くとエレナを待つのであった。

「…来たわよ。何の用なの？」

エレナがノックもせず部屋に入ってきた。

やっぱり何か警戒してる。

「お、ようやく来たか。とりあえず、座ってくれ」

と俺はまだ答えないで椅子を勧める。

「で、何なの？」

エレナは椅子に座ると、いぶかしむようにこちらを見ながら再度聞いてくる。

「いや、お前と個人的にもう少し話したいと思ってさ。魔法のこととかも聞きたいし。駄目か？」

と、俺はジュースをコップに注いで、エレナに渡す。

自分の分には酒を目の前で注いでみせた。

「ふん…。でも、索敵の魔法はまけたりしないわよ？」

不適な笑みを浮かべてエレナはそういうとコップを受け取った。

「分かってるって。ほら、とりあえず乾杯しようぜ」

俺はコップを持ち上げる。

エレナの警戒も大分薄れたようだ。

「乾杯」
「乾杯」

二人とも一気に飲み干すと、俺はまたコップにそれぞれ飲み物を注いだ。

.....

.....

.....

「...あ、あれ？」

ふっ、ようやく効いてきたみたいだな。

よろけたエレナを支えながら俺はほくそ笑んだ。

そして素早くエレナの手を後ろ手にすると、用意した封魔の手枷を付ける。

「はれ？」

エレナは俺を不思議そうに見ている。

ここまでは予定通り。

そして俺とエレナに魔法をかける。

「…はっ。ちょ、ちょっとこれどついうこと!？」

よし、無事に解けたみたいだ。

今掛けた魔法は酔いを醒ます魔法で、酔いを醒ましたのだ。

俺は種明かしを始めた。

「実はこのジュースに酒と同じ効果を与える魔法を掛けてたんだよ」

エレナは酒にあまり強くないらしく、飲みの席でも普段決して酒を飲まないのだ。

ほんと俺がやられたように寝込んだところに顔に落書きしたかったのだが、こいつ慎重な性格らしく寝るときいつも索敵の魔法を使っていて、女性たちに夜這いに行きたくてもいけないんだとか。

全く奥さんいるくせに何てやつらだ。

まあ、一夫多妻制らしいからいいのか？

あ、ちなみに俺が使った魔法は、例の家にあつた本に書いてあつたあの骨の人のオリジリナル魔法らしい。

酒が好きだったんだろうなあ。あそこじゃ、酒なんて手に入らないだろうから。

でも、酒の味がしないようにする魔法はやっぱり俺みたいな使い方

をするために開発したのだろうか？

「酒！？くつ、魔法も使えないし！」

「魔法を封じる手枷を用意したからな。さ、覚悟してもらおうか」
俺はにやにや笑いながら近づく。

「な、何する気よ！？」

「何って朝のお返しだよ。よくもやってくれたな？」

「ま、待つて待つて！ちょっと落ち着こう。ね！？ ほら、あれは
謝るからさ！悪かったわよ！」

「今頃謝られてもな。今のような状況にならなかったら、謝った
？」

「謝るわけないじゃん」即答だった。

「そうか。じゃあ、お仕置きかな」

「まった！今のなし！ちよつと本音が…！」

「余計性質が悪いわ！覚悟は出来た？」

エレナは言葉を飲み込むと、ちよつと思考を巡らせる表情をすると

「三木……、ひどいよ。私、三木がこんな酷いことする人だとは思わなかった……」

と上目遣いで目をつるつるさせながら見てきた。

何てやつだ。演技だって分かってるのに何て破壊力！

「三木のこと信じてたから、ほいほい部屋まで来たのよ？ 普段男がひとりいる部屋なんて行かないんだから……」

部屋まで来たのは、俺が安全パイだと思ったからだと思うが、やばいなこのままこいつに主導権握らすと。

主に俺の精神衛生上。

「そうか、言いたいことはそれだけか？ではお仕置きタイム始まり」

「ちょ、や、やめ、ゝゝ、きゃああああああっ！！！」

「きゃははははは！！！やめ、やめてゝゝ、ふふっ、あはははは！！！」

今、エレナは俺のくすぐり地獄を体験している真っ最中だ。

「ん、どうだ？反省したか？反省したなら、ワンと言ってみろ」

「わ、わん！反省したから早くやめ、あは、あははははは！！！」

まあ、そろそろ反省したみたいだし、開放してあげるかな。

でも、せっかくここまで準備して手間暇かけたのにこのまま開放するのももったいないな。

こんな機会二度とないだろうし。

「よし、じゃあ開放してやるけど、キス一回ね。ちゃんと口にしろよ？」

ととことん外道な俺。

「は？ばかじゃないの？頭おかしいの？」

こちょこちょこちょ。

「きゃはははは！！！！分かった！キスするから！お願いだからやめて！！！」

うむ、ちゃんと上下を分からせないとな。

そして、俺はエレナの呼吸が落ち着くのを待つて、俺は手枷の鍵を解いてやった。

「うし、はずしたぞ。約束は守れよう？……エレナ？」

俯いたまま動かないエレナ。

……あ、直感がビリビリ反応し始めた。

冷や汗が止まらない。

何、命の危機なのか！？

色々検証した結果、今の俺は直感の基本意識的に働かせることで作動するらしく無意識に反応するのはどうやら命の危機とか大きなものだけみたいなのだ。

「……約束は今度でいいぞ！俺はちょっと外の空気が吸いたいか
ら外行ってくる！！！」

ダッシュで逃げる俺。

「……ウィンドバインド」

な、なんだ！？足に枷！？

「よくも…よくも好き勝手やってくれたじゃない。覚悟は出来て
るでしょうね？」

あれ？完全に立場逆転してるんですけど。

「キスとか…、好きなだけ私の靴にさせてあげようじゃない」

———今なら直接見なくてもエレナの顔が想像できるぜ。。。

俺は背後からエレナが近づいてくる音を聞きながら、そつと息を吐くのであった。

……俺、明日生きてるかなあ。。。

レベル	7	経験値	462	次のレベルまで	88
力	1083				
防御力	356				
速さ	933				
体力	664				
運の良さ	206				
賢さ	649				
言語理解	255				
直感	1348				
弓技能	92				
剣技能	16				
槍技能	1004				
短剣技能	284				
魔法	643				

十五話（後書き）

タグに外道って入れたほうがいいかな？ どうしよう。

十六話（前書き）

まだテスト終わってないんだけど…

そして、来月も再試決定しているのが幾つかあるんだけど…

続き書いちゃいました（笑）

てか、大分内容忘れてて、一応読み直しながら書いたけど、矛盾してるところがあるかも。まあ、一段落着いたら最初から修正掛けるので流してくださいw

十六話

昨日、あの後俺に打撃攻撃があまり効かないと気付いたエレナに魔法でこんがり焼かれた俺は、気が付くと大の字になって宿屋の外で伸びていた。

陽の光が眩しいぜ。

どうやらいつの間にか朝になっていたようだ。

しかし、マジ容赦ねえ。。。

折角作ってもらった服だってもうぼろぼろだし…。
あと一着しかないってのに。。。

あいつ絶対最後の方楽しんでたよ。

めっちゃ生き生きしてたし。

てか、外って！わざわざ引きずって来たのか！？

くそっ、魔法耐性とか開放しようかな。

俺はぶつぶつ言いながらも軽く服に付いた土ぼこりを払い、宿屋に

向かって歩きだした。

今日の予定は特になしで自由にしていいらしい。

なんでも昨日までの道が一番危険だったらしく、しっかり体力を回復させるようにとのことだ。

しかし、困ったな。

何をして暇をつぶそう。

俺は集められていた部屋から護衛連中と共にそろそろ出てくると、とりあえず部屋の方に向かって歩きながら考える。

護衛連中の何人かは、娼館に行こうと誘ってくれたやつもいたんだが、みんなでそろそろ行くのは好きじゃないので断った。

嫌いじゃないんだけど、行くなら誰にも知られずこっそり行きたい。

人の評判ってのはどこでどう作用するか分からないからね。

もっと人口が多そうな所で変装してこっそり行ってみよう。

俺はそんな内心をわずかでも出さない至極真面目な顔をして、一つ頷くと今日の予定をまた考え始めた。

寝る…のもいいんだけど、まさか一日中寝るわけにもいかないし…。
村を見て回るのもそれはそれで面白い気もするけど、気分じゃない…。

何となく腕を組んでみる。

ちょっと気分が出てきたw

よし、じゃあどうせなら新しい能力の開発でもするかなー。
いくつか候補もあるし。

俺はそう思い立つと早足で部屋までの廊下を歩いていくのであった。

部屋に入ると俺はドアを閉め、鍵をかける。

一人でぶつぶつ言ってるところを見られて、エレナとかに変態扱いされたくないからね。

ベットに腰をかけ、木で出来た簡易なテーブルを引き寄せる。

テーブルの上にあった備えつきのメモ帳みたいなものを手元に持ってきて、またまた備えつきのペンを手に取って手の上でくるくると回してみる。

万年筆みたいなインクを使うペンだ。

——そう言えば、ペンとか紙とかちゃんとあるんだ。

中世みたいな世界なのに意外と進んでるのかな？

疑問には思ったが、使えないならともかく、使えるんだから別にいいかと思いを中断する。

さて、まずは今の俺のステータスを確認してみよう。俺はアクリル

板を前に出して紙に書き出す。

レベル	7	経験値	462	次のレベルまで	88
力			108.3		
防御力			35.6		
速さ			93.3		
体力			66.4		
運の良さ			20.6		
賢さ			64.9		
言語理解			25.5		
直感			134.8		
弓技能			9.2		
剣技能			16		
槍技能			100.4		
短剣技能			28.4		
魔法			64.3		
肉体操作			31.4		
振り分け可能ポイント			22		
装備	なし				

今まで振り分けポイントをなるべく必要なものだけに振り分けて一

点集中みたいにしてきたんだけど、よく考えたらレベルが上がると全部のステータスが上がるんだから、項目が多いほうがポイントは高くなるよな。

…じゃあ、出来るだけ項目を増やしたほうがいいのか？

いや、そうとも限らないかもしれない。

例えば魔法とか細かい項目を増やしたとして、それを低い数値から上げる必要があるとしたら今のままの全体の能力が高くなっているであろう。「魔法」の項目をひたすら上げていったほうが効率がいいだろうし。

「難しいところだね」

軽い調子で呟きながら考える。

——とりあえず、必要なものだけ開放してみようか。

開放するとしたらまず何にしよう？

そんなの決まってる。

「索敵」

またはそれが出来るもの。

より包括的なものが望ましいよね。

索敵、探知、気配察知、熱源探知、後は動くものに対する探知とか？

熱源探知とかは、生き物じゃなかったら探知出来ないだろうから却下として…

「やっぱり気配察知かな。槍を主な武器にしてる訳だし、その方が武人っぽいよね」

一瞬で決まった。

「よし、じゃあ開放させてみようか」

俺は気配察知を解放するように念じる。

消していたステータスの板が目の前に出てきた。

「気配察知、開放するのに20ポイント必要です、か」

な、なかなか開放するのにポイントを食うじゃありませんか。

しかし、俺はもう決めてしまったのだ。

これでエレナに頼まなくても索敵つばいことが出来るようになるならなんてことはないはず……！！

意を決してポイントを振り込む。

レベル	7	経験値	462	次のレベルまで	88
-----	---	-----	-----	---------	----

力	108.3
---	-------

防御力	35.6
速さ	93.3
体力	66.4
運の良さ	20.6
賢さ	64.9
言語理解	25.5
直感	134.8
弓技能	9.2
剣技能	16
槍技能	100.4
短剣技能	28.4
魔法	64.3
肉体操作	31.4
気配察知	18
振り分け可能ポイント	2
装備	なし

「おお、最初から18もある!」

ということとは、項目は出来るだけ増やしたほうがいいってことかな。

「ふふふ、後はこれを上げていけば…」

思わずにやにや笑いを浮かべてしまう。

だって、これを上げていけばさ、こっ尾行とかされた時にさ、

「そこにいるのは分かっている。出て来い」

なーんて言えちゃうんだよ？よくない？

…そうですか。俺だけですか。

「しかし、ポイントがもうないな。創造具現とか加速とかどうかなって思ったんだけど」

あと、昨日のこともあるから魔法耐性とか。

「開放は出来ないだろうけど、どの位ポイントがいるか位なら見ていいよね？」

さっそく念じてみる。

結果。

創造具現、開放するのに7000ポイント必要です

加速、開放するのに150ポイント必要です

魔術耐性、開放するのに25ポイント必要です

…わーお。

魔術耐性と加速はまあ、常識の範囲内だと思うんだけど、創造具現の7000って何だろう？

いや、確かにめっちゃポイント高そうって思ってたけど、ここまでだったとは。

ちょっと服とか作れたらいいなーって思っただけなのに。

いつかポイントがそれだけ余ったら開放してみようと思いつながら俺はステータスの板を消した。

そして、一気に暇になる俺。

「寝るか…」

そのままごろんと横になる。

しばらくしてちよつとうつととし始めたくらいの頃、扉の向こうに誰かの気配を感じた。
そして、その気配の主はノックをする。

——誰だ？俺に用のあるやつなんて

俺は少しいぶかしみながらも、立ち上がってドアを開けた。

「あれ、キースさんじゃないですか。どうしたんです？」

そこには雇い主のキースさんが直属の護衛の厳つい男二人を伴って

立っていた。

「いえ、ちょうどいいので護衛についての詳しい説明とあなたの立場について少しお話ししようかと。あまり話す時間もありませんでしたしね。今時間は大丈夫ですか？」

「ああ、いえ、特に予定もないので大丈夫です。話を聞かせてください。場所はどこにします？」

「場所は…三木さんの部屋でかまいませんか？私の部屋はちょうど清掃中ということで、出てきたんですよ」

「そうだったんですね。では、どうぞ中へ」

俺は中へキース氏を招く。

キース氏は護衛の人たちに扉の外で待っているように言うと、部屋の中に入ってきた。

2つある方の椅子を引いて、キース氏に勧める。

「ありがとうございます」

キース氏が座ったので俺もテーブルを間に挟んで椅子に座った。

それから1時間程話したんだが、簡単にまとめるところだった。

- ・半年ほどは毎回護衛の仕事をしてもらうということ

- ・半年を過ぎたら好きに行動してもらってかまわないということ

- ・給料は護衛の仕事一回ごとに支払うということ

- ・ドワーフ村への護衛一回につき、金貨5枚を支払うということ

- ・街での住むところは、護衛用の宿舎を自由に使っていいということ

- ・身分証明書をキース氏の名前で発行すること

などなど、俺にとってはありがたいことばかりだった。

「ほんとに何から何まですみません。助かります」

「気にしないで下さい。ドワーフの長老直々の頼みですからね。出来る限りフォローさせていただきますよ」

人の良さそうな顔で俺に微笑むキース氏。

いやいや、頼まれたってここまでしてくれる人はいないって。

長老にも今度ちゃんとお礼を言っておこう。

キース氏を見送った俺は、無性に何かやりたい気分になったので訓練することにした。

槍を持ち、そのまま外に出る。

宿の人にこの近くで槍を振り回せるようなところはないかと聞くと、ちょうど専用の場所が村の端のほうにあるらしい。

俺は教えられた通りにその場所に向かうのだった。

そしてそこでリンと手合わせすることになったり、精神的に疲れて帰ってきたところをエレナにどこいったのかと魔法を浴びせられたのは余談である。

どうやら俺が娼館に行ってたんじゃないかと思ったんだと。

…良かった、行かないで。。。

レベル 7		経験値	482	次のレベルまで	68
力			111.2		
防御力			36.6		
速さ			96.4		
体力			68.9		
運の良さ			20.9		
賢さ			67.5		
言語理解			26.1		
直感			133.6		
弓技能			9.2		
剣技能			16		
槍技能			103.6		
短剣技能			28.4		
魔法			64.7		
肉体操作			31.9		
気配察知			19.2		
振り分け可能ポイント			11		
装備	鉄の槍				
	皮の鎧				

十六話（後書き）

次回更新は、また現実逃避しなければ、2月の2週目以降とかになりそう。でも、流石に再試落ちたら留年だしなあ。。。留年しない程度には頑張らないと（泣）

十七話（前書き）

大変お待たせしましたw 何か思いつきで設定とか考えてたら、そんなに大した量でもないのに一日経ってました（泣）そして、文章書いてても手が止まる止まるw

小説書くのって難しいね。。そして、自分に合った書き方が分からないので、色々試してみています。文体違うし、思ってもあまり突っ込まないで教えてくださいw

テスト終わったから、いっぱい書くぞーw あ、でも、今週は溜まっていた用事を済ませないといけないので、更新はできませぬ（汗）すみませんすみませんorz

十七話

次の日、俺たちは再び馬車に乗っていた。

後1日ほどで街に着くみたいだ。

街に近づいて来たせいか、家とか店とかがちらほら見えてたりする。

護衛の途中じゃなけりや行くところなんだけど、残念だ。

途中、道沿いの宿に泊まってから昼に到着という流れになるとのことだ。

「あゝ、腹減った…」

今日の朝も、朝ごはんなんてものがあるはずもなく、空きっ腹な俺。

あ、あそこを飛んでる鳥、丸々と太っておいしそう…。

我知らずつばをぐくりと飲み込む。

しかし、馬車と鳥では推進速度が違うようで、鳥はみるみるうちに視界から遠ざかっていった。

仕方ない、諦めよう。

お金が有り余るようになったら、3食と言わず5食くらい食べるんだ。

俺は窓の外から視線を外すと、馬車の中の会話に混ざることにした。

街に着いたら何するだとか、ケンの子供自慢やらみんな何だかんだで楽しそうだ。

「そういえば、三木は街についたら何かしたいこととかあるのか？
2日しかないが、そのタリスが案内してくれるぞ」

「何故、私が庶民ごときにそんなことをしないとならない…？まあ、街で迷子になって私たちが恥ずかしい思いをするくらいならいいかもしれないが。しかし、今回は私は実家に帰らないといけなから無理だ。他を当たれ」

と、つれないツンデレタリス。

タリスは、詳しく教えてくれないけど貴族ってやつみたいだから何か呼び出されたとかかな？

社会勉強として護衛に参加しているらしいし。

ケンは家族サービスで精一杯みただから、後は頼むとしたら女性陣か。

エレナかリンかサラさんか……。まあ、この中だったらこの人だね。

「サラさん、暇だったらいいんだけど、街を案内してくれない？」

相変わらずにここに笑っているこの人に俺は頼んでみることにした。

「ちょっと！何で私に頼まないの！？　今一回、目があったじゃない！」

だって、エレナって案内料とか言ってお金取りそうなんだもん。荷物もちにもされそうだし。

「うつ！ ななな何言ってるのよ。 たかがそれ位でお金なんか取るわけじゃないじゃない。 馬鹿じゃないの？」

目が泳いでますよ、エレナさん。

「私は何故駄目なのだ？ エレナみたいにお金を取るつもりは全く無かったが」

リンが俺に聞いてきた。

「確かにリンはお金は要求しないだろうけど…」

代わりに別の物要求されそうぞ。

戦えとか。 そんなことは全く口に出すことなく、 別のこともっともらしく言ってみることにする。

「リンって、 武器屋とか以外に娯楽施設とか、 自分の生活圏以外の場所のことあんまり知らなそうだなと思って。 戦い以外に興味あるの？」

戦い以外に興味があつたなら教えて欲しい。

意外性のあるものだったらしいな。面白いから。

「…そう言われると、確かにない気がするな。うん。ない」

…何かリンの目線が定まらない。

どこことなく落ち着きもなくなってるし。

何か隠しているのか。。

「ああ、リンはね、ぬいぐう!!」

エレナが何かを喋ろうとしたのだが、リンが高速でエレナの口を塞いでしまった。

「ぬいぐう?」

何だそれは。

「エレナ。命が惜しかったらその口しつかりと縫いつけておくことだな。首と胴体が離れるのは嫌だろう？」

エレナはがたがたと震えながら、首を縦に振っている。

一体何を言おうとしたんだか。

エレナはそのまま口を文字通り固く閉ざしているので答えてくれることはないだろう。

命が掛かっているみたいだし

。まあいいかと、俺はリンたちの方から意識をはずし、サラさんの方を見た。

「それで、どうでしょうか。ご飯くらいなら奢るので、お願いしたいのですが…」

サラさんはにこにこ相変わらずの笑顔で

「いいですよ。男の人とデートなんて久しぶりで嬉しいです」と答

えてくれた。

そのふんわりとした笑顔を見て、俺は赤くなった顔を隠すように顔を背けた。

そこまで女性関係に疎かったわけではないのだが、あんな綺麗な笑顔を向けられたことはなかったのだ。

そして、今まで口を固く閉じていたエレナが口を開く。

「サラ。別にお金要求したりしないから、私も行くわ。ちょうど欲しいものもあるし、何よりこの馬鹿と二人きりなんて危ないわ。あなた無防備なところがあるんだから、妊娠させられるわよ?」

「そうだな。私も一緒に行くことにしよう。戦い以外のこともたまには学んでみる必要もあるしな」

結局、四人で行くことになってしまった。

振り回される自分が容易に想像された。

しかし、考えようによっては女の子三人に囲まれるのだから、自分

は男にとっては羨ましい部類に入るんだろう。

その実情はともかくとしてだけど。

この街アドニスは、王都に次ぐ大都市で、70万人もの人口を抱えている。

自分たちを雇っているロンド商会の本拠地もここらしい。

特に商業が発達している街のようで、色々な商会が鎬を削っている。

そのため、基本的に活気がある場所ではあるのだが、やはり光には影があるように裏通りでは治安の悪い場所も見受けられるようだ。

そんな街の大通りを俺たち四人は今歩いている。

街に到着した後、キースさんに事前に用意してもらっていた商会の身分証明書のようなものに名前を書き、偽証防止の魔法をかけてもらい、それを手にそのまま街に繰り出したのだ。

お昼時ということ、まずは腹ごしらえということになっている。

サラさんがお勧めのお店に連れて行ってくれるらしい。

大通りの店を横目に見ながら、みんなでサラさんに付いていく。

しばらくして、大通りから横道に入り少し行ったところにその店はあった。

定食屋ミストという看板がかけてある。

「ここです。着きましたよ」

「へえ、なかなか趣があるところじゃない」

サラさんを先頭にしてぞろぞろと中に入っていく。

中にはそれなりの数の客が入っているようだ。

「らっしゃい！お、サラちゃんじゃないかい！今日は友達連れてきたのかい？」

「ミリさん。こんにちは。はい、仕事先で仲良くなった方たちです。私のお勧めのお店ということで皆さんをお連れしました」

「あら、それは光栄だねえ。サラちゃんに期待されてると分かったら、うちの旦那も張り切るよ。そっちのテーブルに座って待っててくれ！」

はきはきとした喋りで、よく通る声をした恰幅のいい女主人ミリさんの声に押されて席に座る。

メニューがあつたので、みんなでそれを覗き込む。

パスタ系、ご飯系の二種類に分類されるようだ。

そして、それぞれに本日のおすすめの項目もある。

「サラさん、おすすめってありますか？」

「そうですね…。どれも美味しいですけど、やっぱり本日のおすすめが旬のものが使われていたりしていいと思いますよ」

確かに初めて来た店でもあることだし、特にこれが食べたいというものがない今は本日のおすすめが無難な選択だろう。

「じゃあ、俺はパスタの本日のおすすめで。みんなは？」

「私もそれでいいわ」

「私もそれでいいな」

「決まりですね。ミリさん、パスタの本日のおすすめを四つで」

ちょうど水を持ってきてくれたミリさんに、サラさんが注文をする。

「はいよ。今日のパスタは、今ちょうど旬のトリ貝とツブイカの Pasta だからね。期待しておいていいよ」

ミリさんは自身ありげな不敵な顔をこちらに向けると、厨房の方に向かつていった。

「この時期のトリ貝は大粒で身が詰まってておいしいんですよ。ツブイカもこの時期にしか取れないですし。楽しみですわね」

と補足説明してくれるサラさん。

ホントに楽しみのようで、顔を綻ばせている。

これは期待が持てそうだ。

そして、一皿が結構な量があるパスタが来て、おいしく食べながらこの後の行動について話し合う。

「三木さんは、どんなところに行ってみたいとか希望はありますか？」

最初は女性たちで盛り上がって、ポツーンとしていた俺だったが彼女たちも当初の目的を思い出したようで、心なしかちょっと照れている感じで聞いてきた。

別にいいけどね！

「俺は服が欲しいかなあ。後、何か生活用品的なものとか」

「武器なら案内出来るんだが…」

「武器は間に合ってるからいいよ。気持ちだけでもらっとく」

予想通りの発言をさらりと流す。

「では、男性用の服も売っているお店に行きましょう。生活用品は、大通りを歩いて必要そうなものがあつたら買うという形でいいですか？」

「それをお願いします。それ以外は何か知ってて役立ちそうなところを適当に教えてください」

わかりました、とにつこり微笑むサラさんを見て癒されていると、

「今のうちに三木に何を買ってもらおうか考えておかないとね。甲斐性なさそうだから、そんなに期待は出来ないけど」

とすっかり目の前のパスタを平らげていたエレナがのたまった。

「な……」に言ってるのおまえ勝手に着いて来たのおまえじゃないかと言おうとしたが、

「とりあえず、ここは三木のおごりね」という言葉に遮られてしまった。

リンがまさか奢ってくれるのか…？とちょっと期待した目で見てくる。

サラさんは相変わらず笑っているが…。

「そうだな。まあおごりでもいいか」

エレナ以外はと言いたかったが自重した。

絶対噛み付いてくるのが分かってるし。

ここで断ったら小さい男と思われるかもだからな。

お金はあるんだし、将来への投資ということだ。

「ふふふ、分かってるじゃない。こんな美女三人が付き合ってるんだから、当然よね」

…やっぱりエレナにはお仕置きがいるかな。

そして、俺たちはミリさんに美味しかったとお礼を言って、当然のように俺がお金を払って店を出た。

結構量があって美味しかったのに、意外と安かったのは驚いた。

そして、その後服を何着か買ったり、服を選ばされたり、アクセサリ―屋で三人分のネックレスを買わされたり、幾つか店を回っているといった間にか結構時間が経っていた。

空ではもう夕日が沈み始めている。

「ねえ、三木。あんた今日泊まる場所はどっするの?」

今日一番振り回してくれたエレナがそう聞いてくる。

そして、今の俺が持つてる荷物のほとんどがエレナのものと言っても過言ではなかったりする。

「俺は商会の宿舎に泊まることになるかなあ。どこがいいとか分かんないし、無難かなと思って」

「ふーん…。じゃあ、うちの宿屋に来ない？タダじゃないけど、商会の宿舎よりはサービスいいわよ。ご飯もそれなりに美味しいと思うし」

「へー、エレナの家って宿屋なんだ。…そうだな、特にどこに泊まりたいってのはないからお世話になろうかな」

「決まりね。サラとリンは今日はどうするの？うちに泊まってく？」

エレナが二人に問いかける。

聞かれた二人は、お互いにちょっと顔を見合わせると頷いた。

「そうだな。今日はエレナのところに泊まろうか」

「そうですね。エレナさんのところのご飯もなかなか美味しいですし」

今日一日で、俺の中のサラさんのイメージが大分固まったと思う。

美味しいものに目がないんですね。

「じゃあ、行きましょうか。いやー、荷物もちがいると楽ね

」と軽やかに前を歩くエレナ。

確かにね、最初に荷物持とうか？って聞いたのは俺だよ？だけど、普通ここまで持たせるか？

重くはないけど、嵩張って歩きにくいんだ。

俺は道行く人に荷物が当たらないように注意しながら、エレナの後を付いていった。

そうして、しばらく歩いて到着した宿屋は、かなりの歴史を感じさせる建物だった。

少し騙された気分になった。俺がぼーんと件の宿屋を見ていると、

サラさんが苦笑しながら話しかけてきた。

「見た目は確かに古いですけど、中はそれなりに快適なんですよ？
部屋の一つ一つに防音の魔法も掛けてありますし、いい木材を使っているのか多少の嵐でも倒壊したりしませんし。まあ、エレナさんは早いとこ立て替えたいと思っているみたいですけど」

だから、護衛の仕事なんてしている訳ですし、と続けるサラさん。

なるほど、そういう背景があった訳か。金に執着している訳だ。納得。

「そこー、突っ立ってないで早く入ってきなさいよ。置いてくわよ？」

「！ああ、ごめんごめん。今行く」

後ろに付いてきていない俺たちを不審に思ったのか、エレナが戻ってきて声を掛けてきた。

呼びかけに答えると、俺たちは中に入っていくのであった。

レベル 7		経験値	499	次のレベルまで	51
力			113.3		
防御力			36.8		
速さ			96.6		
体力			70.2		
運の良さ			21.2		
賢さ			67.9		
言語理解			26.5		
直感			134.9		
弓技能			9.2		
剣技能			16		
槍技能			103.8		
短剣技能			28.4		
魔法			64.8		
肉体操作			32.4		
気配察知			20.5		
振り分け可能ポイント			17		
装備	鉄の槍				
	皮の鎧				

十七話（後書き）

ほんとはこの後に、18禁までいかないかもだけど、ちょっとやっちゃったwって文章書いてました（笑） 読まなくてもいい文章として、幕間であげようかな？w

ちょっと急展開過ぎる文章だから、どうかなーって思ったけど、一度やらした方がこれから書きやすくなりそうなので、載せます（笑）

まあ、どっちにしても来週以降になりそうですw では、また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7481p/>

我が人生に悔いなし！

2011年3月8日10時18分発行